

月刊

インド



Monthly Journal of the Japan-India Association

財団法人 日印協会 (日印間の政治・経済・文化交流に貢献して 106 年)



〈本会議での討論風景〉



〈コルカタにて〉

第 13 期 日本インド学生会議

目次

- 1. この1年をふり返って..... P. 3
- 2. 「現代インド・フォーラム」について..... P. 5
- 3. 第13期日本インド学生会議 報告..... P. 5
- 4. インドニュース..... P. 8
- 5. イベント紹介..... P. 14
- 6. 新刊書紹介..... P. 14
- 7. 掲示板..... P. 15

1. この1年をふり返って Review for the Year 2009

平成 21 年 12 月 吉日
財団法人 日印協会
理事長 平林 博

財団法人日印協会は、企業会員、個人会員並びに非会員の皆様による、力強いご支援とご協力を得て、この1年も活発な活動を展開することができました。これは偏に皆様の当協会の活動に対する、ご理解の賜物であると厚く御礼申し上げます。

1. 基本方針

インドは改革開放路線を推進し益々その発展の度を強めると共に、いまや押しも押されぬ新興国の雄として、政治的にも経済的にも国際場裏での重みを増しています。他方、インドは引き続き親日的でありわが国を重視しており、わが国は官民双方ともにインドへの関係を深めつつありますが、インドに対する積極的姿勢の度合いにおいて、まだ米欧のみならず韓国や東南アジアにも後れを取っているように思われます。

(財)日印協会は、日印関係の発展にも拘らず、長い間、予算的・人的制約もあり各界の期待に十分に答えてきたとは言えませんでした。この反省に立って、ここ数年来、日印協会は106年の知見と日印双方における人脈を基に、活動を一層活性化し、日印関係者の期待に応えると共に、広く国民各層にインドおよび日印関係について啓発する努力を倍加して参りました。また、日印両国政府との接触も深め、影響力を行使するように努力いたしました。

日印協会は、日印関係を名実ともに「戦略的グローバル パートナーシップ」にふさわしい関係に格上げするために貢献したいと考えております。

2. 新たな公益財団法人認定を得るための準備

日本政府は、昨年12月に施行された一般社団・財団法人法関係3法に基づき、5年以内に全ての社団・財団法人を再検討し、公益法人として認定するものと、そうでないものをふるいにかけることとしました。公益法人の名を利用しあるいは公益法人の地位を乱用している団体や天下り先として税金の無駄遣いをしている団体を規制するのが主目的です。ささやかではあってもきちんとした活動を完全な透明性の下で行ってきた日印協会は、あらたな認定を受ける十分な資格がありますが、法令に沿って十分準備をする必要があります。

そのために、現在の寄付行為に代わる定款案の策定、新たな評議員を選ぶための評議員選定委員会規則の制定に着手いたしました。定款案の骨格については、すでに評議員会や理事会において報告しております。日印協会としては、来年6月の評議員会と理事会の御承認を得たうえで新たな定款を定め、関係書類とともに内閣府の公益法人認定等委員会に提出して、審査を受けるようにしたいと考えております。なお、そのためには、評議員会に先立って、5月ないし6月に評議員選定委員会を招集して新公益財団法人のもとで新たな評議員となる方々を選んでいただき、新定款の付則に記載する必要があります。理事についても、新たな公益財団法人の理事会を想定して人選等を進める必要があります。

協会といたしましては、百年有余の伝統に甘んじることなく、新たな公益財団法人としての認定を取得し、インドの重要性の増大と日印関係の活発化が求める使命を果たしていく決意です。

3. 活動の重点分野

(1) 日印協会の活動を広げ財政基盤を強化するために、活動の拡大と会員数の増大に努力しました。

インドの重要性と日印経済関係の強化に伴い、インドに関係する、あるいは関心を持つ企業が増えてきました。このような企業に対し、日印協会としては協力し支援をしていくのが使命の一つですので、協会の法人会員になっていただくよう働きかけております。そのために、会長、副会長、理事長等協会幹部が、これまでの日印関係で築いた人脈や知見を活用して努力して参りました。この結果、2年前に36社であった法人会員は、現在では90社を超えるに至りました。当協会としては更に多くの日本企業のために活動したい所存であり、また資金的基盤を強化することも必要ですので、法人会員を一層増大したいと思っております。

同時に幅広い国民各層、特に若い人々に対し、各種の手段で日印関係への関心を惹起すると共に、日印協会会員としての加入を呼びかけたいと思っております。現在個人会員は410名程度ですが、日本人のみならず、急速に拡大している在日インド人コミュニティとの関係を強化することも必要です。月刊誌『月刊インド』11月号には、インド人コミュニティのリーダーの1人であるチャンドラニ氏から西葛西でのインド人コミュニティについて苦労話を寄稿(英文)していただきました。これからも在日インド人の皆様との関わり合いを広め、日印間の橋渡しに努力する所存です。

法人会員、個人会員ともに増やしていくためには、協会の常勤役職員のみでの努力では限度がありますので、法人及び個人会員の皆様のご協力をお願いしたいと存じます。

(2) 協会会員および広く一般国民の皆様には裨益するような活動を拡大・強化しました。

* 官民を問わず日印の要人たちと会員の接触・懇談の機会を増やしたいと考えております。特に、インドからの要人については、他の関係団体とも連携しながら、歓迎会や講演会などの機会を提供しました。

* 月刊機関誌『月刊インド』及びweb季刊誌「現代インド・フォーラム」の2つのメディアをさらに充実させてまいりました。また、できるだけ多くの方々にインドや日印関係の情報を伝え、国民レベルでの日印相互理解と友好を増進するために、協会のホームページを充実させてまいりました。

* インドにおける主なニュースと日印関係の主要な動きを毎月整理して皆様にお届けすることとし、「月間インドニュース」として『月刊インド』に掲載するとともに、ホームページにも掲載するようにしました。

* ホームページ上に会員ほか皆様からの意見が寄せられるように措置しましたが、残念ながら投稿はまだありません。投稿を奨励するとともに、いずれはインドと日印関係に関するフォーラムとして会員相互に意見交換ができるようにし、また、会員の意見をまとめて両国政府、関係団体に伝えたいと考えます。

* インドと経済・文化・学術などの分野で関係を樹立ないし強化しようとする企業や団体、さらには個人に対し支援・後援を行い、適切なアドバイスを差し上げ、ネットワーキングを支援するよういたしました。

* 今後の日印関係を担う青少年の交流のため、政府が推進する交流計画や留学生交換に対し協力するとともに、民間レベルでの青少年交流についても、協会の知見や人脈をもって支援することといたしました。その1例は、本号の日本インド学生会議の記事にも表れております。

* 日印間の文化交流については、引き続きアイデアや企画を提供すると共に、必要な行事には直接・間接に関与してまいりました。今後とも、多くの日印関係団体、文化関係者が企画・実施する文化行事等の広報を支援し、その成功の為に協力致します。

(了)

2. 「現代インド・フォーラム」について “Contemporary India Forum”

去る10月初めに刊行、現在協会のホームページに掲載中の季刊誌「現代インド・フォーラム 第3号」は、“インドのエネルギー事情と地球環境問題”をテーマに取り上げ、この分野の専門家によるホットな特集との高い評価と反応を各方面から頂いております。

本レポートが発行されてから、次のような動きがありました。

- ▶ 中国が米国を抜いて世界最大の二酸化炭素排出国となったことが公表され、従来 数値目標の設定に反対してきた中国が単位GDP当り40～45%の削減目標を公表(2005年比2020年目標)。
- ▶ 米国が2005年比17%減の削減目標を公表(2005年比2020年目標)。
- ▶ インドも単位GDP当り25%の削減目標の設定を検討。

12月7日からコペンハーゲンで開催される国連のCOP15(第15回国連気候変動枠組み条約締結国会議)に向けて世界の主要国の温暖化ガス削減の動きが活発化してきています。インドは世界第4位の排出国ですが、実情は中国の排出量の1/4以下(世界全体の5%以下)です。他国の動向を睨み前向きに取り組む始めたインドの状況が詳しく紹介されています。

まだご覧になっていない方も、是非当協会のホームページの「現代インド・フォーラム」欄をクリックし、ご一読下さい。

最新号は、どなたでもご覧になれますので、非会員の方でも興味をお持ちの方がいらっしゃいましたら、是非当協会のホームページをご覧になるようお勧めください。

さかのぼって創刊号・第2号をご覧になる場合は協会会員専用のパスワードが必要です。会員で協会からのお知らせが届いていない方は、お手数ですが事務局までお問い合わせ下さい。



〈現代インド・フォーラム 第3号 表紙〉

来年1月には冬季号として

“対インド経済協力特集”を発刊予定です。ご期待下さい。

また、ホームページでは皆様からの提言を募集しております。談論風発を期待しております。

3. 日本インド学生会議 報告 JAPAN-INDIA STUDENT CONFERENCE

「日本インド学生会議」は、1996年に石津達也氏(当時 国際文化研究センター)をはじめ、長浜浩子氏、後藤千枝氏のご尽力により設立され、「学生の学生による両国の将来のための会議」をモットーとする日印の相互理解と親善の活動を続けている団体です。毎年夏に日本とインドで交互に開催する「本会議」をメインイベントとして、1年間そのための準備や国内でのイベント・勉強会の活動を行っています。組織は10～20名の首都圏の大学生から成る小規模な団体ですが、昨年京都・立命館大学との提携をきっかけに更に活動を広げる計画とのことです。

今年の本会議はインド開催で、8月16日から9月7日まで約三週間、コルカタ、チェンナイ、デリーで行いました。今年は文化交流会に加えテーマ毎に日印の学生が発表、そして議論を行う3つの分科会(Politics, Economics & Environment, Culture)での討論に重点を置き、企業訪問、ホームステイ、観光、学校見学などもしました。

分科会のテーマ例

インド側プレゼンテーション Industry, STATUS of ANCIENT WOMEN, Indian Food

日本側プレゼンテーション The Separation of Religion and Politics, Nuclear Issue, over population, Global Warming

本会議終了後、11月1日(日)代々木オリンピックセンターで報告会が行われ、報告書と分科会ごとの成果が披露されました。報告書は『第13期 日本インド学生会議 活動報告書 2009』と題して170ページを超える非常に興味深いものです。当協会事務局で保管してありますので、いつでも閲覧頂けます。



〈13期報告会 於 代々木オリンピックセンターにて〉

下記は、今年度13期の実行委員長の染谷葵さんから寄稿頂いた「本会議」の報告です。

〈日本インド学生会議 報告〉

第13期実行委員長 染谷 葵(そめや・あおい)

8月16日から9月8日までインドのコルカタ・チェンナイ・デリーで開催された、第13期日本インド学生会議・本会議に参加しました。

1都市目は西ベンガルのコルカタ。深夜の空港までコルカタメンバーが迎えに来てくれました。日本人側10名は飛行機の疲れがありましたが、インドに到着したこととコルカタメンバーに会えた興奮がそれを上回り、皆元気一杯でした。翌日、本会議のスタートとあって、緊張と興奮で開会式の会場は熱気であふれています。インド側は伝統舞踊と劇、日本側は日本紹介ビデオの上映、書道パフォーマンスと、歌を歌いました。インド側の発表は、多くの時間をかけて練習したのだろうと一目で分かるような洗練されたものでした。彼らの歓迎の気持ちが嬉しくて、これからの一週間がとて素敵なものになるだろうと予感しました。二日目からは分科会がスタートです。政治経済・環境・文化の班にそれぞれ別れ、1グループ5・6人で机を囲み、午前が日本側プレゼン、午後がインド側プレゼンと割り振りました。あちこちから質問が飛び交い、どのテーブルも大変賑わっていました。心配していた英語も、彼らのヘルプもあって問題なく乗り切りました。真面目な話をずっとしていると疲れてしまうけど、チャイブレイクが癒してくれます。分科会中に大学のラジオ局から取材を受け、少しだけ日本文化について紹介させてもらいました。そして市内観光や工場見学を重ね、私たちは親密になっていきました。そんな一週間は瞬く間に過ぎ、お別れの時がやってきます。閉会式では皆たくさん笑って、少し泣いて、踊りました。最後は空港で最後まで別れを惜しみ、コルカタを後にしました。

感傷に浸る間もなくチェンナイに移動です。インドに来たことがある日本人メンバーも、南インドは初めて。まずは丸っこいタミル語の看板や南インド人特有の風貌を目にし、州が違うだけなのにまるで国が違うようでびっくりしました。初日はホームステイだったので、迎えに来てくれた家族とともに日本側メンバーはばらばらに。翌日は盛大なセレモニーの後、工場見学へ。大量に生産される自動車の部品を作る工場、自分より大きな大型クレーンの部品に皆びっくりしていました。チェンナイでは長い移動が多く、バスの中では眠ったり、インドの音楽に合わせて踊ったりしていました。チェンナイでの分科会は、2つの大学を訪問した際行われました(ゲリラ分科会も2回ほど行いました)。Meenakshi Univ. と Dr. M. G. R Univ. は共に優秀な歴史ある大学です。そこにはタ

ミルナド州以外にも、地方から多くの学生が集まっていました。プログラミングが大好きだったり将来はエンジニアになりたいと目を輝かせる彼らに、非常に刺激を受けました。彼らとは一日のみの交流になりましたが、すごく印象に残っています。分科会では核心をついた質問を浴びせられ、日本人メンバーは少しじろぎ気味でした。チェンナイでは同じ学生と一週間共にすることはなかったのですが、その分ホテルの従業員、町中の人々、バスの運転手さん、そして私たちの保護者のような存在となった(私たちを10人の妹弟たちだ〜と言ってくれました!)警備員のおじさん、通訳として行動を共にしてくれた2人のお姉さんと、とても親しくなりました。慌しく移動していたので体調を崩すメンバーもいましたが、故にホストする側も相当大変だっただろうと思います。コルカタでも思いましたが、その疲れを感じさせない彼らには尊敬の念を抱きます。

そしてついに最後の一週間を過ごすデリーに到着です。路上で寝そべる牛や交通量の多い道路をすごい速さですり抜けるタクシー、絶えないクラクション…。ノスタルジックなコルカタ、人情味溢れるチェンナイ、そして大都会デリーと、バランス良く回ってきました。流暢な日本語で迎えてくれた Jawaharlal Nerhu Univ. の学生たちは、日本への留学経験もあり、きっと最高の教育を受けてきたのだな、と思いました。開会式を国際交流基金で行い、そこでは近代ダンスを披露してくれました。そのままティータイムに入り、参加者と顔合わせをしました。次の日は分科会です。専門的なことも日本語で話しをするので少々面食らってしまいました。仲間内では英語やヒンディー語も使いますが、私たちとは完全に日本語でした。そのせいか分科会内容も今までより更に深く詰められたと思います。学術ではボディアランゲージはあまり意味を為さない、私たちも英語の勉強がもっとも必要だな、と反省しました。

デリーのスケジュールは制限がほとんどなく、自由にその場その場で動くことが出来ました。明日はこうしよう、移動はこうして…など日印の学生で予定を作っていくことは、とても楽しかったです。デリーメンバーの提案でタージマハルにも行きました。夜明けと共に出発し、バスの中で喋っていたらあっという間に到着しました。さすがにアグラは観光地だけあって、路上パフォーマンスをする人や物売りがわんさかいます。つついへんテコなおもちゃを買ってしまう人もちらほら。私の部屋にも、既に壊れてしまったおもちゃがあります。そして一日中皆で過ごし、閉会式を迎えました。これについて本会議も終わりだなんて信じられなくて、寂しくなりました。一か月の出来事が走馬灯のように頭の中をかけめぐります。

今はもう日本に慣れましたが、成田に着いた時あまりに涼しかったのでびっくりしたのを覚えています。そしてどこにもインド人の友人がいなくて、今までのことが夢だったような喪失感に襲われました。しかし、彼らと SNS やスカイプで近況報告や写真の交換などをし、今お互いそれぞれの時間を生きていると思うとき、その喪失感は消え、むしろ心がほんわりと和みます。またきっと会えるだろう、その時に今よりもっと成長した自分を見せられるようになりたいな、と思います。海の向こうで出会った学生たちは、同時代を生きるライバルであり、遠くで支えてくれるかけがえのない友人になったのです。

4. インドニュース 11 月 News from India

1. 内政

11 月 4 日

- 英字各紙は、ネパール共産党の常任委員会メンバーのガジュレル氏が、ネパールのマオイストがインドのナクサライトに全面的な支援と協力をさしおけていると発言した旨報道。
- パール判事子息のプロシャント・パール氏が死亡 (83 歳)。

11 月 5 日

- 英字各紙は、米国で逮捕されたラシュカル・エ・トイバ (LeT) のメンバー 2 人 (パキスタン系米国人とパキスタン系カナダ人) が、デリー中心部にある国防大学やウッタラカンド州の名門学校等を対象としていたことが FBI の取り調べで明らかになった旨報道。

11 月 7 日

- 英字各紙は、バッタチャルジー西ベンガル州首相が、マオイスト掃討作戦が継続しているラルガル地域が所属する西ミドナプル県を訪問し、ナクサライトに対し、武器を置かない限りマオイストとの対話はある得ないとの立場を改めて表明するとともに、マオイストを駆逐するための新たな作戦を開始する方針を表明した旨報道。
- マハラシュトラ州知事公邸で、アショーク・チャバン州首相の新内閣宣誓式が行われる。

メモ：

マハラシュトラ州では先月の州議会選挙の結果、 कांग्रेस党及び民主主義者 कांग्रेस党 (NCP) 連合による、第 2 次チャバン政権が発足。7 日現在で、新内閣は 38 閣僚で構成されており、 कांग्रेस党と NCP の閣僚ポストのシェアは 23:20。

11 月 10 日

- ウッタル・プラデシュ州、西ベンガル州、ケララ州、アッサム州、ヒマーチャル・プラデシュ州、ラジャスタン州、チャッティースガル州で 7 日に行われた州議会補欠選挙の結果が発表される。

メモ：

補選 31 議席中、 कांग्रेस党が 3 分の 1 にあたる 10 議席を獲得し、 कांग्रेस党の優勢、BJP 及び左派の退潮という下院総選挙の流れは今も続いていることを示す結果となった。ただし、ウッタル・プラデシュ州では、大衆社会党 (BSP) が 11 議席中 9 議席を獲得し大勝した。

11 月 13 日

- 英字各紙は、米国で逮捕されたパキスタン系米国人ヘドレイ (LeT のメンバー) が、合法的なビジネスの目的でインドに入国し、テロ実施前の下見を行っていた模様である旨報道。

11 月 14 日

- ラジャスタン州ジャイプール近郊で列車が脱線し、7 名の旅客が死亡。

11 月 19 日

- インド議会の冬期会期が開幕 (会期は 12 月 21 日まで)。原子力被害に関する民間責任法等計 83 法案が審議される。
- ウッタル・プラデシュ州西部地域のサトウキビ農家数千人が、10 月に政府が設定した砂糖の新たな買取価格に抗議するため、ニューヨーク市内で大規模なデモ行進を実施。

11 月 23 日

- インディアン・エクスプレス紙は、労働雇用省が 9 月に発出したメモランダムには、「高度の熟練

者、専門職業者の就労査証の取得は、被雇用者の 1%の範囲でみとめられると明記されている旨報道。

- インディアン・エクスプレス紙は、6 月 30 日にシン首相に提出されたバーブリー・マスジッド事件調査委員会報告書を独占入手した旨報道。

メモ：

報告書には、バーブリー・マスジッドの破壊に関与した人物等として、ヴァジパイ元首相やアドバニ下院野党議員団長等 BJP 関係者が記載されている一方で、中央で政権の座にあったラオ首相らの名前はあがっていない。

11 月 24 日

- タイムス・オブ・インディア紙は、中距離弾道ミサイル“アグニ 2”の試射がオリッサ州のホイーラーズ島で行われたが失敗であった旨報道。

11 月 30 日

- インディアン・エクスプレス紙は、ジャンムー・カシミール州ラダック地方における中国との実行管理ライン付近で進められていた道路建設が中国軍の反対で中止になった旨報道。
- 印空軍戦闘機“Su-30MKI”1機がポカラン(ラジャスタン州)南西部において墜落。

2. 経済

11 月 2 日

- タイムス・オブ・インディア紙は、北東部 8 州のうち、15 年前には 4 州が全国所得平均を上回っていたにもかかわらず、最新のデータでは 7 州が全国平均を下回っている旨報道。

11 月 4 日

- 道路交通省は、撤退条項や利害関係者及び解約条項の変更等、国道建設分野における入札制度を数ヶ月内に大幅に変更する旨発表。

11 月 7 日

- フィナンシャル・エクスプレス紙は、187 の小規模港について主要港関税局の管轄下に置くことを検討している旨報道。

11 月 9 日

- フィナンシャル・エクスプレス紙は、道路交通省が、ラジャスタン、マハラシュトラ、グジャラート、マディア・プラデシュ州を対象にした 6 大国道プロジェクト(延長 400~600Km)を計画中である旨報道。

11 月 10 日

- フィナンシャル・エクスプレス紙は、インドの主要企業は静かに排出削減努力を強化している旨報道。
- 環境森林省は、ヒマラヤの氷河が気候変動によって溶けていることを証明する決定的な証拠はないとしたディスカッション・ペーパーを公表。

11 月 11 日

- 英字各紙は、インド財閥大手のリライアンス・インダストリーズが、グジャラート州カンベイ海盆で油田を発掘した旨報道。
- 英字各紙は、10 日に開催された州財務大臣グループ委員会において商品サービス(GST)に関する初のディスカッション・ペーパーが提示された旨報道。
- ヒンドゥー紙は、ルノー・日産が、バジヤジ・オート社と共に超低価格車をインド市場で 2012 年に製造することを正式に決定した旨報道。

11月12日

- タイムズ・オブ・インディア紙は、国営港湾公社のジャワハルラル・ネルー・ポート・トラストがインドで初の港湾特別経済特区(SEZ)を計画している旨報道。

11月13日

- エコノミック・タイムズ紙は、タミルナド州政府が、マヒンドラ・アンド・マヒンドラ社の同州での自動車製造工場建設に関する投資計画を承認した旨報道。

11月14日

- ビジネススタンダード紙は、政府が新たに発出したガイドラインにより、外国の航空会社は、ピーク時の大きな機体の使用とフライトの追加が可能となる旨報道。

11月16日

- ヒンドゥー紙は、バナジー鉄道大臣が、鉄道省による強制的な土地収容は行わないと述べるとともに、土地の収用が決定的に重要な場合は、補償額に加えて家族に対して鉄道省における雇用が与えられると述べた旨報道。

11月17日

- エコノミック・タイムズ紙は、インド日産自動車がチェンナイ市内に本部オフィスを新設した旨報道。

11月19日

- 英字各紙は、インド財閥大手タタ・グループのラタン・タタ会長が、後継者には外国人の登用もありうると発言した旨報道。

11月20日

- エコノミック・タイムズ紙は、インドのエーデルワイス・キャピタルと東京海上ホールディングスが合弁で生保会社を設立する旨報道。
- 英字各紙は、日系鉄鋼大手 JFE スチールとインド民間鉄鋼大手 JSW スチールが包括的な業務提携を結んだ旨報道。
- インディアン・エクスプレス紙は、フォーブス誌の調査によれば、ムケーシュ・アンバニ・リライアンス・インダストリー社会長がインドで最も裕福な人物であった旨報道。

11月25日

- インディアン・エクスプレス紙は、政府が外国貨物船を安全及びビジネス上の理由で沿岸交易から除外する可能性がある旨報道。

11月30日

- 印統計局は、2009年度第2四半期(7月-9月)のGDP成長率は7.9%と発表。

3. 外交

11月2日

- ヒンドゥー紙は、APECはG20に次ぐ重要なフォーラムであり、国連安保理常任理事国入りが進まない現状の中で、みすみす加盟をあきらめる訳にはいかないフォーラムである旨の論説を掲載。

11月4日

- インド外務省は、カルザイ・アフガニスタン大統領の再選に祝意を表すアナウンスメントを発表。
- 英字各紙は、パキスタンの情報大臣等が南ワジリスタン地域のタリバン関連施設でインド製の武器等が見つかったと述べたことに対し、クリシュナ外相がインドは一切関与していないと述べた旨報道。
- インド外務省は、タルール閣外相が1~3日の日程でモーリシャスを訪問し、次世代軽ヘリコプターの供与式や沿岸監視レーダーシステム8基の供与に関する覚書への署名を行った旨発表。また、モーリシャス大学で、「インド-アフリカ：開発におけるパートナー」と題したスピーチを実施。

11月5日

- 英字各紙は、インド北東部を流れるブラマプトラ川の上流(中国チベット自治区)で中国がダム建設を行っている疑いがあることに関し、ラオ外務次官が、中国はこれまで一貫してそのような活動は行っていないと否定していると発言した旨報道。

メモ：

本件については、5日、バンサル水資源相が、中国が建設中のダムは小規模で中印国境から1,100km離れており、こうしたダムはブラマプトラ川にすでに15あるところ、建設中のダムが水流に影響を与える証拠はない旨発言、中国外交部報道官も、中国は責任ある国であり、他国の利益を損なうようなことは決してない旨発言している。

11月6日

- ヒンドゥー紙は、2008年9月に署名された印仏民生用原子力協力が仏上院で承認され、今後下院で審議される旨報道。
- 韓印EPAが韓国国会本会議を通過。
- デリーで第10回印EU首脳会合が行われ、会談後共同声明が発出される。

メモ：

共同声明は35パラグラフに及ぶ長文で、気候変動や国際金融危機、テロ対策といったグローバルな課題から、アフガニスタンやミャンマー等の地域的課題につき言及。気候変動では、両首脳が、地球の平均気温の上昇は産業革命以前比で2度以上にしてはならないとの科学的見解を認識する旨記述。

11月8日

- インディアン・エクスプレス紙は、パキスタンが、インドとネパールとの間で犯罪人引渡条約が締結されるのを妨害する目的で、ネパールで逮捕されたパキスタン人をインドに引き渡すことができないようにする除外条項を含む条約案をネパール政府に渡していた旨報道。

11月9日

- 印外務省は、「貿易・経済・科学・技術・文化協力に関する印露政府間委員会」の共同議長であるソビヤーニン露副首相が12日までの日程でインドを訪問する旨発表。

- エイジアン・エイジ紙は、カプール陸軍参謀長が、7日から9日にかけてイスラエルを訪問している旨報道。
- 英字各紙は、8日にダライラマがアルナーチャル・プラデシュ州タウンを訪問し数百人の僧侶及び信者による手篤い歓迎を受けた他、9日にタウンで行った説法には3万人以上の信者が集まった旨報道。

11月10日

- インド・コロンビア外交関係樹立50周年に際し訪印中のベルムデス・コロンビア外相とクリシュナ外相が会談し、会談後共同声明を発出。

メモ：

両国外相は、外交当局間会議を定期的を開催することを決定した他、2国間投資促進保護協定等への署名が行われたことを歓迎。

11月11日

- インド外務省は、訪印中の劉奇葆・中国共産党四川省委書記がクリシュナ外相への表敬訪問を行った旨発表。

11月12日

- 訪印中のラッド豪首相とシン首相との間で印豪首脳会談が行われ、共同声明及び安全保障共同宣言が発出される。

メモ：

共同声明では、両国首相の相互の接触の強化や議会交流を再活性化の必要性の強調、新たな若手政治指導者プログラム設置の提案等を記載。また、安全保障及び防衛面での強固な関係を再確認したほか、豪による印のAPEC参加に対する強い支持や豪のインドの国連安保理常任理事国入りを支持。エネルギー・気候変動及び水資源に関する協力や知的パートナーシップに言及。

- インド外務省は、在インドの中国大使館及び総領事館が一部の州出身者に対し発給している、旅券にホッチキス止めにする形の査証による中国への渡航は有効と見なされない旨の「重要渡航情報」をウェブサイトに掲載。

メモ：

中国は、アルナーチャル・プラデシュ州出身者に対しては2007年以降、及びジャンムー・カシミール州出身者に対しては最近になって、通常の旅券に貼り付ける形ではなく、旅券にホッチキス止めにする形で査証を発給。いずれの州も印中間の係争地が含まれていることから、中国側のこの措置はインドによる実効支配を肯定したとみなされることを回避する狙いがあるとみられ、インド外務省による今次措置はそれに対する対抗手段と思われる。

11月15日

- ムカジー財務大臣がスリランカを訪問しラージャパクサ大統領と会談。国内避難民の再定住問題等につき議論。

11月16日

- イランのモッタキ外相が訪印し、クリシュナ外相らと会談。石油・ガス、電力、陸上交通及びインフラ整備等につき協議。
- エイジアン・エイジ紙は、ハシナ・バングラデシュ首相が、12月18日から4日間の日程で訪印予定である旨報道。

11月17日

- インドを公式訪問中のハーパー・カナダ首相がシン首相と首脳会談を実施、会談後共同声明発出。

メモ：

共同声明では、2 国間投資促進保護協定、社会保障協定及び民生用原子力協力に関する交渉締結に向けた取り組みといった、2 国間関係の制度的枠組み強化のために継続されている取り組みを歓迎するとともに、印加間の包括的経済連携協定の可能性を探求するための合同検討グループの設置を発表。また、エネルギー分野における協力に関する覚書に署名。

11 月 18 日

- 英字各紙は、オバマ大統領が中国を訪問中に発出した米中共同声明の中で、「インドとパキスタンの関係の改善と進展を支持する」と言及されていることに対し、第三国が印パ関係に介入することにはインドは常に反対であると批判的に論じている。
- ヒンドゥー紙は、インドとカナダは包括的経済連携協定に向けた共同研究グループを設置した旨報道。

11 月 20 日

- 英字各紙は、19 日にカルザイ・アフガニスタン大統領の就任式に出席したクリシュナ外相がクレシー・パキスタン外相と会談した旨報道。

メモ：

会談でクリシュナ外相よりは、パキスタンがムンバイ・テロの犯人を裁くスピードを上げるよう要請、クレシー外相は、パキスタン側の捜査状況を説明するとともに、インド側から提供された 7 件の捜査資料における証拠は裁判所に提出される旨約束。

11 月 24 日

- 訪米中のシン首相がオバマ大統領との間で米印首脳会談を実施。

メモ：

会談後共同声明を発出。戦略対話の 5 本柱(戦略的協力、グリーン・パートナーシップ、教育、経済及び貿易、保健)それぞれについて具体的成果あり。

- 仏議会下院は、印仏民生用原子力協力協定の批准を承認するための法案を全会一致で可決。

11 月 27 日

- インド外務省は、11 月 29 日から 12 月 3 日にかけて、サントメ・プリンシペのティニー外相が訪印し、タルール外務担当閣外相と会談を行う旨発表。
- 英字各紙は、インド石油天然ガス公社が、イランの南パルス・ガス田の第 12 フェーズにおいて 20~25%の権益獲得を狙っている旨報道。

11 月 28 日

- カナダ首相府は、加印原子力協力協定交渉が完了した旨発表。

4. 日印関係

11 月 9 日

- 訪日中のアントニー国防大臣が北澤防衛大臣と会談し、会談後共同プレス発表を発出。

今月の注目点：活発な首脳外交

11 月には、EU、豪、カナダからそれぞれ首脳が訪印し、また、シン首相がオバマ政権で最初の国賓として訪米するなど、活発な首脳外交が行われた。COP15(第 15 回気候変動枠組条約締約国会議)が迫っていることもあり、いずれの会談でも、「クリーン・エネルギー・気候変動イニシアティブ」に合意(米印)、エネルギー分野における協力に関する覚書に署名(米加)、太陽光による冷却及び小型配電盤に関するプロジェクトを支援するために 100 万豪ドルの拠出(印豪)等、気候変動やエネルギー安全保障分野での成果が大きく打ち出されている。

5. イベント紹介 Japan-India Events

◇日印文化交流記念祭

11月23日(月)東京都台東区のラ・ベルオーラムホールで『シュリサティヤ サイ セヴァ オーガニゼーション』日本支部(比良竜虎当協会理事が相談役)主催、インド大使館、(財)日印協会、(財)東方研究会など多くの団体の後援で、同支部発足34周年を祝う日印文化交流記念祭が開催されました。

シン駐日インド大使も出席してお祝いの言葉を述べられ、当協会からは原常務理事と青山事務局長が出席し、当日所用で欠席の平林博理事長の祝辞を披露しました。

『シュリサティヤ サイ セヴァ オーガニゼーション』は、1950年代から南インドを中心に農業用の灌漑施設や水道設備などのインフラ整備や貧困者や孤児のための学校建設、インド各地での病院建設など、社会奉仕活動や文化活動を幅広く行ってきた団体です。

◆日本の新進作家展 vol.8 「出発-6人のアーティストによる旅」

会期：2009年12月19日(土)～2010年2月7日(日)

場所：東京都写真美術館

〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

電話：03-3280-0099

詳細：http://www.syabi.com/details/sakka_vol8.html

新刊書紹介欄の『インド照覧——百瀬俊哉写真集』の百瀬氏が出品を予定されています。

❖インド政府観光局移転

新住所：〒104-061 東京都中央区銀座1-8-17 伊勢伊ビル7/8F

TEL：03-3561-0651/52

音声案内：03-3561-0653/54

FAX：03-3561-0655

E-mail：indtour@smile.ocn.ne.jp

11月24日より新事務所にて業務を行っています。

6. 新刊書紹介 Book Review

§ 『インド照覧——百瀬俊哉写真集』



発行：2009年10月10日

発行所：株式会社 窓社

定価：3,800円+税

世界の都市に存在する「からっぽの風景」を探求し撮影した写真家百瀬俊哉氏の、インドでの写真をまとめたものです。

『視覚の混乱を感じました。～(中略)～1回のシャッターを切るのにとっても時間のかかる旅でした』(「日本の新進作家展」カタログより)。そうして写し取られたものには、あのインド特有の喧騒も臭いも感じられず、意外にも寂寥感を覚えます。百瀬氏のイメージの“記憶と結晶”に共鳴してしまったのでしょうか…

7. 掲示板 Notice

〈次回の『月刊インド』の発送日〉

次回の発送は1月15日(金)を予定しております。チラシの封入をお考えの方は、事務局までご連絡下さい。

〈年末年始の業務について〉

協会事務局の年末年始休暇—**12月29日**火曜日から**1月4日**月曜日まで
(28日月曜日の業務は午前中のみとなります)
お問い合わせ・ご連絡等は、休業期間を避けて下さいますようお願い申し上げます。

〈編集後記〉

気がつけば、カレンダーは最後の1枚になり、師も走ると言われる月となってしまいました。年末ともなれば、凡人は更に走ります。そして日本人の凄いところは、その忙しい合間を縫って、25日まではクリスチャン、大晦日の除夜の鐘では仏教徒、一夜明けて神社へ初詣と、次から次へと宗教を渡り歩くことになんの躊躇もないことでしょうか。

今年も本年の最終号を皆様にお届けする事ができました。これも皆様のご協力・ご支援のお陰です。会員の皆様方がご家族と共に良き新年を迎えられますようお祈り申し上げます。

【訂正とお詫び】

『月刊インド』11月号において間違いがありました。下記のとおり訂正してお詫び申し上げます。

- 1) 6頁 第2パラ 1行目 (6頁 16行目)

誤:「～It is has been thirty-one years」→正:「～It has been thirty-one years」

- 2) 7頁 第3パラ 2行目 (7頁 21行目)

誤:「month of July, 2009, the long time ～」→正:「month of July, 2000, the long time ～」



日印親善のために会員の輪を広げましょう



法人会員・個人会員の入会をお待ちします

1903年、大隈重信、澁澤榮一らによって創設された財団法人日印協会は、これまで日印の相互理解と両国の親善増進のために、日々地道な努力を続けてまいりました。ここ数年来の日印の良好な関係をより一層深めるためにも、会員の獲得は重要な課題であると考えています。インドに興味のあるお知り合いの方がいらっしゃいましたら、是非日印協会をアピールして下さい。

ご希望により、当協会の活動に関する諸資料をお送りいたします。

日印協会の活動に賛同して頂ける多くの法人会員・個人会員のご入会をお待ちしております。

☆年会費：個人	6,000円/口	☆入会金：個人	2,000円
学生	3,000円/口	学生	1,000円
一般法人会員	100,000円/口	法人	5,000円
維持法人会員	150,000円/口		(一般法人・維持法人会員共)

本誌に掲載致します投稿等は、執筆者のご見解・ご意見であり、当協会の見解を反映するものではありませんので、念のため申し添えます。

月刊インド Vol.106 No.10 (2009年12月11日発行) 発行者 平林博 編集者 青山 鑛一
発行所 財団法人日印協会
〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14 スズコービル2階
Tel: 03-5640-7604 Fax: 03-5640-1576 E-mail: partner@japan-india.com
ホームページ: <http://www.japan-india.com/>

